
花火と共に

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花火と共に

【NZコード】

N8126C

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

「ナンが新一に戻つて、初めての夏。蘭と恋人になつて初めての夏。去年まではまったく違う2人の関係。約束していた花火大会。楽しみにしていた花火大会。・・・けれど、蘭の部活の強化合宿のため、その夢は、はかなく壊れた。新蘭夏企画投稿作品です♪ジャンルは『新蘭』です。哀ちゃんファンの人にはごめんなさい。

遠く彼方の方からどんどん、どんどん、と何度も打ちあがる花火の音。窓から眺めればきっと漆黒を照らす遠くの花火が見られることだろう。

けど、敢えて俺はそうしなかった。一人ぼんやりと耳にしながら、蘭が先日買つて冷蔵庫に入れておいてくれたスイカをサククリと齧りつつ、上の空でテレビを見る。

「あ～、ちっくしょう！」

一昨年はただの幼馴染として、去年はただの居候として、そして今年はようやく「恋人」の立場で東京でも有名な杯戸花火大会に行くことを約束していたのに。

「ごめん、関東大会の強化合宿が重なっちゃつていけなくなっちゃつた」

そう言われたときには少なからずショックを受けた。

毎年恒例、隣県のはずれのとある施設で行われる夏季合宿。都内十数校の高校が参加するのだが、各校2・3人の有望選手しか参加できない。

蘭は高1のときから選ばれてはいたけれど、だからといって、今年は参加しないということは許されないこともわかる。彼女がどれほど試合にかけていて、どれほど次の全国大会への意欲を燃やしているか。しかも今年は高校3年。彼女にとって最後の大会だ。是非でも抜けられない合宿だろう。頭ではわかっている。けど、心はどうしても騒いでしまう。寂しいと思ってしまう。

「あ～あ、つつまんねえな」

食べかけのスイカを皿に戻し、ソファの上でじろりと横になる。せっかくの花火大会なのに何もしないでこりやつて「口」、「口」するなんて。・・・一人で行くにはつまらない。博士に電話でも入れようか。確か彼もまた子供たちを連れて、その会場にいるはずだ。母さんが先日子供たちのためにと4着、色違ひの浴衣と甚平をNYから送つてくれた。NY在住の日本をこよなく愛する著名な芸術家がいるそうで、藍染や絞り染めなど日本の染め方で丁寧に仕上げられていて。子供たちはそんな色の浴衣を初めて着るからとても喜んでいたことを思い出し、口が綻んだ。

・・・けれど既に会場は沢山の見物客。今からじや携帯電話を持つていたつて落ち合うことは難しいだろう。

ならば服部に電話を入れようか。

しかしそう思った後で、確かに今日は寝屋川の方でも花火大会があるって言つていたことを急に思い出した。

甚平姿で、隣に勿論和葉ちゃんを連れて、花火見物を楽しんでいるに違いない。自分の都合で2人のデートを邪魔するわけにはいかなかつた。それにあとで何か報復されても困る。かといって、事件がありさえすれば飛んでいく氣でいたのに、それもなく。どうやら犯罪も一時休戦のようで。さつと警視庁のメンバーもロマンチックにこの空を見上げていることだろう。

「見たかつたな、あいつの浴衣姿」

今年の浴衣は絶対あいつに似合っていたのに。

・・・今年は2人でデパートに出向き、新しい浴衣を買つたりして、「楽しみだね」なんて話したりしてたのに。去年とは違い、同じ目線で、そして「恋人」の立場で彼女に触れ、同じものを見て感動したかったのに。金魚すくいもしたかつたし、わたあめも食べ

たかつた。射的もしたかつたし、ラムネを飲んだり、力キ氷も2人で食べたかつた。

夏祭りを彼女と一緒に楽しみたかつた。彼女じやなきや、きつと誰とでも楽しむことはできなかつた。

なのに。

「あー・・・あ」

わつきからこねばっかりしか言つてない氣がする。

「さうり、狭いソファの上でもた寝返りを打つ。先日、浴衣を受け取りにきた灰原にそのことを愚痴ると、我関せずという顔で、「去年の彼女の辛さをようやく味わうことができよかつたじゃない。実際横で見ているのと自分が体験するのじゃ全然違うでしょ?」なんてさらつと言われたけど。・・・わかっちゃいるけど。だけど。

「・・・・・なんかかっこわリーな、俺」

「デートがおじやんになつたぐらいでこんなにショックを受けるなんて思つてもみなかつた。こんなじめじめ弱つている姿を誰にも見てほしくない。逆に誰にも電話しないでよかつたんじゃないか、なんて思つたりした。」

時刻は8時00分を少しまわつていて。

遠い空に輝く赤や青の色とりどりの花火の音を聞きながら、その下で手を繋いで綺麗だねと笑う彼女の姿を思い浮かべながら、俺は不貞腐れた気持ちのまま、ゆっくりと目を閉じた。そんなじや。

ズズズ、とテーブルの上の携帯電話がバイブレーションを鳴らし、俺は寝転んだままその音の主を探りで探した。

それから「はい・・・」と間延びした声を発する。事件だとし

ても、行つたところのテンションが変わるとは思えなかつたけれど。

「・・・新一？」

「つー？」

突然聞こえたその声に驚いた。

・・・蘭だ。

思わずがばっと飛び起きて、ソファに座り直すと、しつかりと携帯を握つて耳に当てる。

「・・・びっくりした、どうしたんだよ？」

「何、突然電話しちゃつたら、いけなかつた？」

クスクスと含み笑いをして電話の向こうで蘭が訊ねる。

「せひじやねーけど・・・。ただ、突然だつたから・・・」

「・・・あ、ごめん。もしかして寝てたとか？」

申し訳なれりに蘭は声を小さくさせた。

「・・・ん、大丈夫だよ」

「・・・そう？」

「ああ」

いじけた気持ちで寝ようとしていたのが事実だけど、そんなことは言えるはずもなく。

「そうだ、合宿おつかれさ」

『ま』まで言い終わらないうちに、どん、と大きな花火が電話の向こうで鳴り、俺は僅かに顔を上げた。

「そつか・・・」

小さく呟く。

「そつちも、今日なんだ」

「え?」

「花火だろ、後ろの」

「・・・あ、ああ、うん・・・。・・・聞こえた?」

声のトーンから少しだけ驚いたような様子でいる感じを受けた。どん、とまた一つ大きな音がする。

遠くの空に目をやれば、そこでも一つの大きな花火が空に咲き誇り、ゆっくりと花弁を散らしていく。あっちでも同じように綺麗な花火が咲いていて、それをきっと合宿にきている仲間と眺めていけるのだろう。それで俺のことを思つて電話をかけてくれたのだ。これほどまで弱つているなんてまさか予想だにしていないだろうけど - - -

本人さえ自分の気持ちに驚いているのだから - - -。

だから彼女の戸惑ったようなその返事も、きっと自分だけが友達と花火見物をしていることに罪悪感を抱えてのことだったのだろう。そう思つたからわざと声のトーンを高くする。

「あんま気にすんなよ。別に花火なんてまた見れるんだし。・・・
・そつちで花火見物楽しんでこいよ

「違うの!違うの!――」

突然甲高い声を上げるから俺は思わず耳を携帯から遠ざけ、片目を瞑つた。

「んだよ、こきなり。・・・何が違うんだよ

まさか仲間じゃなくて男の子と2人だなんて言つたじゃないだろ?うな? そうなれば話も別だけれど。・・・そんなことはあるはずないけれど、万一のこともあり得るから。

園子のような性格の持ち主がある合宿のメンバーにいたとすれば?

彼氏がいふと言つてもその地元の高校生と試合の後のアフタータイム・・・なんてこともありえなくはないのだ。

「それがね」

言葉に詰まる蘭に対し、妄想ばかりが頭を支配する。

「・・・だから何?」

「それが・・・

どん、・・・どん、と花火が電話の向こうで続けざまに上がつた。

そして、聞こえるのは駅の乗降の際に流れる聞き覚えのある音楽と、それに到着駅を告げる駅員のアナウンス。

『杯戸町～・・・杯戸町～・・・』

「うん」「・・・ハイ・・・・ド?」

思わず耳を疑つたが、蘭が困つたような声で肯定した。

蘭が合宿している場所は『ハイド』といつ町だったつけ？

いや、そんなことはないはずだ。じゃあ、今この音楽は何だ？
頭にクエスチョンマークを何個も抱え、俺は目を白黒させながらも一度訊ねた。

「…………」「」とだ？

「…………うん、だから、その…………帰つて、きりやつた」

「帰つてきりやつた、つて……」「

驚きで乾いた喉を潤すため、携帯電話を耳に当てたままキッチンまで行き、冷蔵庫から麦茶の入ったボトルを取り出すると、コップになみなみと注ぐ。

「その…………園子がね、電話入れてくれたみたいで」「園子？電話？」

意味がわからない。なんで園子が？一体何のために…………これまで考えなくとも大体予想はつくが。麦茶を一口、口に含む。

「…………祖母危篤。すぐに帰つて来い、つて伝言を頼まれた、ですって」「

最後まで話を聞く前に、あまりの衝撃に思わず口に含んだ麦茶をぶふっと吐き出し、激しく咽こんだ。

「…………その…………」「

何やつてんだ、あいつ。

大丈夫？なんて心配してくれる蘭の言葉を上の空で聞きながら、

俺はあいつに電話を入れることを考えていなかつたことを思い出した。もし事前に何かを聞いておけばすぐに気づくことができたのに。いや、彼女に電話したとろでそんなに大きく変わつていなかつたかもしれないけれど。

「園子に合宿に行く前、ちょっと話しててさ。そしたらいい考え方があるってあの子言つてたのよ。・・・私に任せとつて。だから今日電話を貰つて驚いたわよ。

慌ててお母さんに電話をかけたらおばあちゃん元気にして『るつて聞いて・・・。それで初めて思い出したの。後でメールももらつたし』

「・・・で、帰つてきたのか」

俺はにやにやと大口を開けて笑つている園子の姿を思い浮かべながら、頭を抱えるような気持ちでこう訊ねた。

「そ、サボつたわけじゃないのよ?ちゃんと練習もしてきたのよ?明日で最後だつたし、みんなも帰つたほうがいいよ、つて言つてくれたし。ていうか帰らなきやいけない雰囲気だつたし。その・・・・・・ね?わかるでしょ?」

「わかんねーよ

「つづつ!..」

俺は笑いを堪えるのに必死だつた。

何やつてんだ、園子のやつ。深刻な声色で合宿所の職員に電話をかける園子の姿、そして彼女の嘘に気づいた後、ドキドキしながら帰りの

荷支度を始める蘭の様子を想像して思わず笑えた。

「ねえ、・・・笑つてるでしょ?」

どうやら俺のくつくつく、と忍び笑いが聞こえたらしい。拗ねたような声で彼女がそう訊ねた。

「笑つてねえよ」

「嘘つ、笑つてるつ。もう、新一のバカバカ！・・・大変だつ

たんだからね！」

「ああ、そういうしいな」

でもせうやって彼女は帰つてきてくれて。

「・・・ああ、おつかれさん」

いつのまにか元気を貰つていた。彼女が近くに来ているということで、もうすぐ逢えるということで今まで沈んでいた気持ちが急浮上していた。

「ホントになさけねえな、俺」

思わず蘭に気づかれないよう、ぽつり、呟いた。

これがあのときの俺と蘭のときみたいに、俺がコナンになつたときみたいにあいつが俺の前から突然いなくなつたとしたら、一体自分はどうなつてしまつたのだろう。

デートが出来ないつてことは2週間前からわかつっていたのに、こんなにし�ょげ返つて。

コナンになつて、蘭のいいところを沢山間近で見て、余計に惚れてしまつたからかもしれないけど、それでもこれは非常に情けない。

こんなこと、絶対蘭の前で言えるわけがないけれど。

そんなことを思いながら、俺は腕時計で時間を確かめた。現在

8時08分。ここから米花駅までの徒歩も入れて、杯戸町まで電車で20分弱。ギリギリだけれど、なんとか終了には間に合いそうだ。

「……じゃあ、今からそっち行くから……。待つて」

「うん、勿論っ。急がなくて大丈夫だからね、気をつけてきてね」

俺の言葉に、彼女の表情がぱあっと明るくなつたような感じが電話越しに見えた。

「ああ……動くんじゃねーぞ? また後で連絡すっけど。そちら辺、お祭り騒ぎでテンション高くなつた変な野郎が多いんだから。待つてる間、退屈かもしれないけど……」

浴衣姿はお預けだけれど、今年の夏はまだまだ始まつたばかりで。もし今年の夏がダメならば来年の夏も再来年の夏もある。

だからそれまでの楽しみにしておけばいいじゃないか。そう思うことにしたのだ。だって今は彼女が近くにいるというそれだけで嬉しいんだから。

「ありがと。だいじょぶ、浴衣着て待つてるから。そんなに時間待たないよ

「…………え?」

思わず耳を疑つた。彼女の言葉に今日は何だか驚かされてばかりだ。

「園子が持つてきたのか?」

「ううん……そうじゃなくて……。『おなか壊せば行けるかなあ』とか、『熱出せば行けるかなあ』とか……そんなことを考えて。万一のためにバッグに入れておいたんだよ」

「……………万一つて……」

そんなこと、めつたにあるわけないの……。俺は思わずふつと噴出した。

「まさか仮病でも使おうとか思つてたとか？」

「そ、そんな不真面目なことするわけないじゃない、新一じゃないんだから！」

そう必死に否定する彼女の声は僅かながらに震えていて。それがほんの僅かでもそう思つていたというサインであるわけで、俺は思わず口元を綻ばせた。

真面目で他のメンバーを思いやる蘭にはそれをすることはなかなか勇気がいること。

バッグを開けて、奥底にきちんと置まれた浴衣セットを見てはきっと溜息をついていたのだろう。そういうやつだったとはわかつていたけれど。自分を想つてくれてることはとうにわかつていたことだけれど。

でも体全体でそれが伝わったから、嬉しくて嬉しくて仕方なくて。・・・思わず本音が零れた。

「早く、会いたいな・・・オメーに」

「うん・・・私も」

一週間ぶりの彼女との再会。

逢つたらまず最初に何をしよう。浴衣姿の蘭に『可愛い』と素直な気持ちを差し出すか。『おかえり』と囁つか。それとも、細い彼女を力強く抱きしめるか。

可愛らしい唇に、唇を重ねるか。沢山したいことがありますぎで、どうしていいかわからなくなってしまつけれど。

けれども何はなくとも、早く彼女の顔が見たくて。彼女の生の声を聞きたくて。

俺は準備も間々ならず髪の毛を手櫛で軽く梳かすと、食べかけのスイカもそのままに、携帯電話を握ったまま、部屋を急いで飛び出した。

(後書き)

こつぶです、こんばんはー。

今回は新蘭夏企画に投稿させてもらつたものをこちうでも投稿させていただきました。

花火と共に。

こちらに転載していただくときに、急遽タイトルを考えました（笑）
花火大会の話。・・・昔書いたHANABIより1年後構想・・・
と考えてくれる人もいらっしゃるかもしませんが、ベツモノです。
書いたあとでそういうHANABIとネタが煮てる！って思つて・・・
。弁解しちゃいます。HANABIは米花町にてやる米花花火大
会。これは、杯戸町にてやる杯戸花火大会。・・・ちょっとだけ、
違ひでしょ（笑）

蘭ちゃんの可愛い部分、いっぱい書いたと思います。

こーいう蘭ちゃん、大好きです。・・・もー、哀ちゃんが一番です
が（笑）。連載頑張ります。

それではここまでお読みいただきまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8126c/>

花火と共に

2010年10月8日14時37分発行